

0. はじめに

今回私たちは、今までの流れから戦後のシュルレアリスムがどのようにして衰退していったか、ダダイスムとシュルレアリスムが現代までどのように影響し続けているかについてまとめました。戦後に発生するシュルレアリスム衰退に関する様々な要因の中、ブルトンは死ぬまでほぼ永続的にシュルレアリストとしてシュルレアリスムを追求していき、様々な宣言や声明などの活動を繰り広げ、シュルレアリスムの「突破口」を模索し続けます。今回は（ブルトンを中心とした）シュルレアリスムが歴史上終焉へと向かうまでの活動を俯瞰していくとともに、そこに関係する衰退の要因を第二次世界大戦後の状況を重ねた上で、「いつシュルレアリスムが終わったのか」また「シュルレアリスムが衰退するきっかけとなる大きな要因とは何か」という二つのポイントに注意を置きながら発表を進めていきたいと考えています。

1. 戦後—実存主義の台頭

—第二次世界大戦後の状況

平和は訪れたものの、戦争のもたらした破壊と大虐殺、核爆弾の脅威と人間の品位の崩壊とに向き合わなくてはならなかった。アメリカとソ連の対立を軸とする冷戦の開始や赤狩りの本格化など、社会は大きく変わり疲弊していた。

1930年代に全盛期を迎えていたシュルレアリスムも、第二次世界大戦後の状況の中では、戦前と同じようにその影響力を保持することは非常に困難なこととなっていた。

—シュルレアリスム衰退の兆しの要因

①実存主義の流行

戦中の体験→実存主義のイメージ（社会の中での個人の孤独の感覚）に通じている。

戦後、実存主義は知的流行としてしだいに受け入れられるようになり、かつてのシュルレアリスムの賛同者たちもいっせいに実存主義に引きよせられていった。

②戦後のシュルレアリスムに対する拒絶反応

批判1：戦後の変化を遂げた状況に対して、戦前と変化のない反応を示しているまま！

批判2：シュルレアリストたちは大戦中に亡命の道を選んだ！

⇒戦争の影響により芸術家たちはシュルレアリスムから離れていく

→ブルトン自身も『開幕の決裂』（1947年6月）の中で、シュルレアリスムが実存主義に押されていることを認めている。シュルレアリスムは、その影響力を持ち続けてはいたが、新しい世代を引きつけるだけの力は失いつつあった。そしてこれから戦後20年間に及ぶ衰退期に入っていくことになる。

◎実存主義

人間の本質ではなく個の実存を哲学の中心におく思想的立場。

第二次世界大戦後に世界的に広まった実存主義は、戦争の体験から時代に生きる人間の不安や苦悩とその悲劇的認識が強くなった。実存は孤独・不安・絶望に付きまとわれていると考えるのがその一般的特色。ピカソの共産党加入も実存主義の哲学者や作家との交流から促されたものである。

2. 芸術と革命の両立を目指して

2-1 芸術運動としてのシュルレアリスム

—エロティズムの復活

デュシャンの作品において主に見られた傾向

主な画家：ピエール・モリニエ

ジャン=ジャック・ルベル

『EROS 展』-1959

参加者：ジョイス・マンズール	強度のエロティズムの彷彿させた
ジャン・ブノワ	サドの遺言から発想された演劇的なイベント
メレップ・オッペンハイム	女体盛を彷彿させる食事会の演出

—オートマティスム/アウトサイダー・アートへの関心

1950年にブルトンとパーレンが和解したことによってある程度進んでいた傾向

■オートマティスム

主なオートマティスム画家

- ・ シモン・ハントイ
 - ・ ユーディット・レーグル
 - ・ ジャン・ドゴテックス
 - ・ マルセル・ルブシャンスキー
- これら若い画家たちがオートマティスムの火付け役に

■アウトサイダー・アート（アール・ブリュット）

「アール・ブリュット（生の芸術）は、芸術的訓練や芸術家として受け入れた知識に汚されていない、古典芸術や流行のパターンを借りるのでない、創造性の源泉からほとぼしる真に自発的な表現」（引用 Wikipedia）

- ・ デュビュッフェ「アール・ブリュット協会」設立
- ・ ブルトン著 エッセイ『野をひらく鍵、狂人の芸術』（1948年）

—魔術的芸術への探求

ブルトンが「シュルレアリスム宣言」以来興味を示していた事柄

■魔術的芸術—四つの時代編成から成っていた—

- ・ 先史時代
- ・ アルカイック（古風）な社会、及び未開社会における魔術の媒介手段としての芸術の時代
- ・ キリスト教中世以降隠蔽を余儀なくされてきた魔術の、近・現代社会における危機の時代
- ・ シュルレアリスムによって再び見出された魔術の時代

→これらの探求目的とは、「より良い方向にむけての<精神の無条件の解放>」という秘境的伝統に依拠していた

→シュルレアリスト（ブルトン派）は実存主義に反し、彼ら理想を追い求めていくための一つの手段として、極めて純粋性を帯びるオートマティスムやアール・ブリュットなどに興味を示し、新たに芸術という範囲を形成していく。しかし、この理想主義によって、またブルトンによる除名によって、シュルレアリストたちは拡散し、シュルレアリスムの根源にあった思想もある者から見れば分裂し、1930年代の頃のような活発性は欠けていき、過去の産物として見られるようになっていく。

2-2 政治運動としてのシュルレアリスム

—第二次世界大戦後のシュルレアリスム機関紙

・『ネオン(何ものでもなく、すべてであり、存在を開く)』(1948-49年)

運営：ブルトン、シュルレアリスムの新参者たち（サラヌ・アレクサンドリアン、インドリヒ・ハイスラーなど）

方針／特徴：シュルレアリスム美学の中に初めて明示的に倫理が導入された

・『メディオム』(1951-55年)

運営：ブルトン、ジャン・シュステルなど

方針／特徴：シュルレアリスムの価値観に立って世界の時事的な局面を取り上げた

・『シュルレアリスム、メーム』(1956-59年)

運営：ブルトン、ジャン・シュステル

方針／特徴：シュルレアリスムのこれまでの新雑誌の存在理由を明示した

- ・精神の連続性を強調すること
- ・若者の期待に答えること
- ・シュルレアリスム運動の活発さを証明し、そのいかさまの解釈を暴くこと
- ・シュルレアリスムの判断の厳正な自立性を保証すること
- ・自由と解放を探求すること

→これら機関誌は、政治的メッセージと美学に対するシュルレアリスムとしてのメッセージを新しく作り上げ、宣言し続けていたが、いずれも短期間で終わってしまう。しかし、いずれも革命運動としてのシュルレアリスムを徹底的に主張し続けていた。同時に、戦後とともにわき上がるジャーナリストによるシュルレアリスムに対しての批判にも反論し続けた。

一政治と不可分のシュルレアリスム

- ・『自由はヴェトナム語だ』(1947年)

内容：フランスによるインドシナの再植民地化を攻撃

- ・『ハンガリー、昇る太陽』(1956年)、『告発カレンダー(シュルレアリスム、メーム誌掲載記事)』(1957年)

内容：スターリン主義を攻撃しつつ、弾圧された人々との連帯を表明

- ・『アルジェリア戦争に服従しない権利についての声明』(1960年)

内容：アルジェリア人のために自由を要求し、戦争の命令にそむくことの権利を擁護

(同時期「アルジェリア戦争反対フランス知識人行動委員会」発足)

→この時期のシュルレアリスムは戦後においても、世界各地におけるスターリン主義、帝国主義に対し反論していたし、論文や機関誌の中でシュルレアリスムに基づく声明文を掲載する運動をしていたなど、政治に注意力を集中していたと言える。

3. ブルトンの死、そして現代へ

3-1 ブルトン死前後のシュルレアリスム活動

雑誌『ラ・ブレーシュ』発行(1961-65)

内容：エロティックなイメージ ex)コンラート・クラフェク

映画・ポップアートについての議論

「冷戦」政治下の現代について など

ブルトンの発言

シュルレアリスムは今日、そのベクトルを『シュルレアリスム革命』誌のなかにはなく、『ラ・ブレーシュ』誌のなかに求めるべき一つの力である。

→歴史化するシュルレアリスムに対する現実性の無い努力

1966年 ブルトンの死

ブルトンの遺産を永続させようとする誌『アルシブラ』発行(1967-69)

→短命に終わる

ブルトン死後、シュルレアリスム方向にそって活動する者も多かった。

・ルイス・ブニュエル／『ビリディアナ』(1961)『ブルジョワジーの密かな愉しみ』(1972)

・フランクリン・ローズモント／『アンドレ・ブルトンとシュルレアリスム』(1978) など

→次第にシュルレアリスムの知的影響力が弱まり、体制側からの支持が始まる。

—シュルレアリスムの共有財産化

・個別研究の主題となる芸術家たち

パトリック・ワルドベルグによるエルンスト論

ベンローズ『マン・レイ』(1975)

・詩人たちの作品の新版刊行

ピエール・ナヴィル『超現実の時代』など

→シュルレアリスムは一般の興味をひき共有財産化

<政治面での影響>

1960年代 運動の提示した理想主義は大衆文化や自由の希求の中に浮上

ヤン・シュヴァンクマイエル『パンチとジュディ(棺の家)』(1965)

ストライキや学生運動にブルトンの書物から引用されたスローガンを使用

→精神の解放(シュルレアリスム)は抗議行動という作品を生んだ。

3-2 ポストモダン社会へ

- ・ その後も多く見出されるダダとシュルレアリスムの問いかけ
アントナン・アルトー 「残酷演劇」
ジョルジュ・ペレク 『消滅』(1969) など
- ・ 哲学者たち、精神分析家たちの実験に見られるシュルレアリスムの実験との共通点
フロイトの精神分析法 など

1970年代 ダダとシュルレアリスムの遺産における対照的な二つの形の出現

- ① ユーモアと知性の結びつきの重要性を認める形
アンディー・ウォーホル (1928-87) …デュシャンの方法を推し進め、大衆的イメージを操縦。
- ② コンセプチュアリズム (概念主義) の純粋性を追求
ヨーゼフ・ボイス (1921-86) …社会的・政治的問題を芸術のうちに復活させた。



シュルレアリスムは様々な方向に分裂し、現代芸術の思想や精神に少なからず影響を与えている。

ex) 広告・ファッション

芸術的実験と政治的解放の関係が商業主義側によって引き離される

→ 弱まるイメージ表現の効力

→ 「驚異」の言語が大衆視覚文化を豊かにし、非合理の受容を促進

—発表に向けて

今回、第二次世界大戦以後のシュルレアリスムの政治的関わりと、理想主義に基づく表現手法への探求を調べていく上で、シュルレアリスムの核となる概念が浮き彫りになってきた。そして、現代へと進むにつれ、時代性とともに歩んできたシュルレアリスムの遺伝子がどういった部分にあるのかもなお分かりつつあるのではないだろうか。

考察は、後の本発表時のときまで入念に固めていくつもりだが、まずここで言えることは、私たちの主張／視点とは、革命運動としてのシュルレアリスムが本来のシュルレアリスムであり、それに伴った表現手法は、副次的な産物だったのではないかと考えている（矛盾もそこに含まれるが）。

というわけで、みなさんの班発表のときに研究してきたであろう時代におけるシュルレアリスムの政治的運動を再度確認してきた上で発表に付き合ってもらいたい。そうした上で、再度 20 世紀最大の芸術運動であったシュルレアリスムの功績、そして今現在私たちが考えられるシュルレアリスム／芸術とは何かという段階に踏み込むことができるのではないかと考えている。

佐藤 田中 木村 山崎